

氏名	いわもと たかし 岩 本 崇
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 355 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	墳墓副葬品と古墳時代の社会

論文調査委員 (主査) 助教授 吉井秀夫 教授 上原真人 教授 泉 拓良

論 文 内 容 の 要 旨

古墳時代社会を考察するには、政治的な側面だけではなく、古墳築造の背景にあるさまざまな側面を考慮することが肝要である。すなわち、古墳を構成する諸要素の個々の意義、さらにはそれらの要素が結びついた古墳を、環境や地域という側面をも視野に入れつつ通時的に検討し、日本列島で古墳が築造された経緯と展開を明らかにする必要があると考える。そのうえで集落や都市といったほかの側面を考慮しつつ、巨大な墳墓というモニュメンタルな構造物に多大な労力を費やした、古墳時代社会の特質に迫るべきであろう。

しかし、そうした研究の基礎となるのは、あくまでも古墳を構成する要素の個々にたいする地道な検討であると筆者は考える。そこで本論文では、古墳時代前期を中心とした時期の社会の一端を明らかにする手段として、社会の一側面を担う葬制のなかでも、とくに副葬品に限定して分析を加え、実証的な検討に基づく基礎的な作業をおこなった。

本論文の中心的な対象は、かつて小林行雄が「同範鏡」の分有関係に着目して論じた三角縁神獸鏡であり、このほか三角縁神獸鏡以外の器物の分析結果を加味することで、それらの器物を受容した社会の動向と特質を明らかにすることをめざす。対象とする時間幅は、Ⅰ部は弥生・古墳時代の墳墓副葬品のいくつかを具体的な資料としてとりあげる。そして、つづく第Ⅱ部において本論文の議論の中核をなす三角縁神獸鏡を分析する。

まず第Ⅰ部第1章においては、弥生時代の東日本の墳墓に副葬される鉄釧をとりあげ、加工方法の差による鉄材の断面形態の違いに注目し、さらに全体構造を考慮して、分類を試みた。そして、全体を断面形態の差から4群に区分するいっぽう、全体構造を大きく螺旋形・渦巻形・単環形に整理した。さらに、こうした型式学的分析の結果をふまえて、鉄釧をとりまく現象面からアプローチを試みた。

そして、具体例をあげながら、鉄釧には地域性が存在すること、銅釧とは異なる技術系譜にあり、その構造は鉄という素材にたいする適応の結果と考えられること、装着した人物があらかじめ決定されていた可能性が高いことなどを指摘した。とくに、螺旋形鉄釧が出現する背景としては、単なる青銅製品の代替品という説明ではなく、通常の単環形の腕輪を複数装着するという社会的機能性に基づく規定と、鉄素材にたいする柔軟な適応という2つの要因を想定した。また、保有量や墓域以外で出土する例の存在から、鉄釧が基本的には装身具であったと指摘し、結果として墓にもちこまれることになった可能性が高いと考えた。そのうえで、鉄釧を生み出した地域のあり方をみる限り、弥生時代後期から終末期において、それぞれの地域は独自の主体性をもちつつ、一定の距離を保ちながら交流・交易をおこなっていた可能性を想定した。

第Ⅰ部第2章においては、古墳に副葬される鉄製品のひとつとして鉄製刀剣類、なかでも鉄剣に焦点をあてた。とくに装具の形態から分類し、その構造を明らかにする点に主眼をおくことで、従来個別検討の枠におさまりがちであった装具から鉄剣の変遷を説明した点に特徴がある。また、同時期に存在する鉄刀との関係なども考慮しながら、変遷の画期をみいだした。具体的には、まず鉄剣装具の細部における構造を整理した。そのなかで、把縁の形態が装具の機能性と密接にかかわる点に着目し、把縁の形態から鉄剣を分類した。さらに、把頭の形態から細分を試みるとともに、そのほかの要素から分類

の有効性を検証した。検討の結果、把への装着方法から鉄剣を二大別し、そのいっぽうを2型式5類型に細分し、全体を3型式6類型に整理した。さらに、型式学的な観点と出土古墳の年代をもとに、これらの把の前後関係と併行関係について検討し、古墳時代の鉄剣を4段階に整理した。そのうえで、同時期に存在する鉄刀の装具と比較し、あわせて把の生産状況を考察することで、鉄剣の変遷における諸段階の特質を述べた。

なかでもその変遷の第3段階においては、ほぼ把が1型式に集約されるとともに、把巻にも画一的な様相を確認できるようになる。すなわち、把だけでなく把巻を含めた装具全体の変化と評価することが可能であり、この段階をもっとも大きな画期とみた。その時期は古墳時代中期初頭にあたり、各地で大型前方後円墳が出現した時期に相当する。こうした点や各地における生産遺跡の確認例から、鉄剣の変革が王権と各地の首長の関係の微妙な変化とも関連するものである可能性を説いた。

第I部第3章では、古墳時代前期後半から中期前半の古墳、ならびにこの時期に併行する韓半島の墳墓から出土する筒形銅器をとりあげた。まずは、これまで明らかにされていない製作技術を製作時に残された痕跡から復原した。そのうえで、鋳型構造の差を反映する目釘穴と透かしの位置関係の違いに注目し、型式学的な観点からその相違が時期差を反映するものと考えた。さらに、副葬配置や古墳の規模と形態などから、筒形銅器に複数の機能を想定できること、特定の対象に配布したのではなく、幅広い階層の被葬者が入手しえた器物を構成した可能性を指摘した。

そのうえで、筒形銅器の製作技術が韓半島と日本列島で基本的に同一の技術によるものである可能性を述べ、先行研究で想定されている畿内王権を介した配布活動によってもたらされたとは考えにくいことを説いた。とくに、流通の背景には近畿地方から瀬戸内沿岸地方を中心とした西日本の広い範囲における地域間交流が深くかかわっていると考えた。

また、第I部第4章では古墳時代開始期に副葬される画像鏡を対象として、その製作年代と日本列島への流入のあり方について分析した。日本列島に流入した画像鏡に2世紀末から3世紀初頭の年代を与えうる例が目立つことを示し、先行研究の成果も参考にしながら、朝鮮半島を経由する流通経路によって各地の有力者がそれぞれ独自にこれらの鏡を入手した可能性を説いた。とりわけ畿内地域を除けば、これらの鏡を1面のみ副葬する古墳が比較的多いという事実から、そうした鏡の保有のあり方が古墳時代開始期における地方首長の実態を示すものと評価した。

そして第II部第5章では、断面形態がきわめて共通する三角縁神獸鏡を材料に、鏡範をおこす際に使用される挽型が共有された可能性を示した。とりわけ、断面の共通現象が鈕の形態、内区幅、内区区画の位置、内外区の段差の程度、外区幅、縁部形態という鏡の形態を規定する部分の一致によるものであることを説き、三角縁神獸鏡の挽型にはこれらの要素が盛り込まれていたと考えた。そのうえで、挽型の一致が規格の共有に結びつくと想定し、そうした規格の共有が三角縁神獸鏡の特質のひとつである可能性を説いた。

第II部第5章の検討結果である形態の共通性が規格に結びつく可能性を考慮して、第II部第6章と第II部第7章では三角縁神獸鏡と「仿製」三角縁神獸鏡の生産とその展開について考察を試みた。まず外区や鈕、乳といった要素をそれぞれ型式分類し、その対応関係をもとに「鏡群」を抽出した。つぎに、得られた鏡群が規格を反映したものであるという想定を、文様などほかの要素との対応関係から検証した。そのうえで、製作者ないしは製作者集団を異にする「系統」や系統のまとまりである「製作系譜」ごとに鏡群の変遷を跡づけた。さらに、異なる系統・系譜間に共有されるさまざまな要素により併行関係を定め、三角縁神獸鏡の変遷モデルを組み立てた。そして、その変遷モデルをもとに、規格を反映したと考える鏡群の動向から規格のあり方の推移をうかがい、生産の画期をみいだした。

検討の結果、三角縁神獸鏡と「仿製」三角縁神獸鏡をそれぞれ4段階に区分し、それぞれ中途にひとつずつの画期を設定した。それぞれの画期は、系統と規格のあり方の変化を反映したものであり、それらの画期の背景には三角縁神獸鏡生産を支えた製作管理体制や東アジア情勢の変動を想定することが可能であると推測した。

また第II部第8章では、生産面のあり方を検討するいっぽうで、三角縁神獸鏡出土古墳での副葬鏡の配置についても分析を加えた。まず、配置類型間には特定場所に鏡を置くという点で相互に関連をもつものが多く、配置場所と鏡面の向きなどの諸傾向が一致する例が多いことから、鏡のとりあつかいにかかわる一定の規範が存在した可能性が高いと述べた。そして、前期古墳における鏡のとりあつかいにもみる共通性は、畿内地域との結びつきの強さを比較的ストレートに反映している側面が強いと考えた。また、鏡の副葬配置に時期的な画期が存在することも指摘した。さらに、鏡の配置場所の差が、文様

モチーフや面径、とくに副葬されるまでの保有形態の違いなどに結びつく想定し、そうした鏡にたいするとりあつかいが畿内地域を中心とした首長間ネットワークのなかで伝達・共有されたものである可能性を説いた。そして、これらの分析結果をふまえて、三角縁神獸鏡をはじめとする鏡が古墳時代前期において果たした社会的な役割について推論を試みた。

さらに第Ⅱ部第9章では、三角縁神獸鏡の終焉に着目し、生産面における特質と、主要な副葬年代を明らかにすることを主眼とした。まず、終焉段階の三角縁神獸鏡に、新たな文様の採用や、文様の新たな使用方法がみとめられることを指摘した。そして、その背景に一定の生産量の確保といった問題や、製作技術の衰退が深くかかわっている可能性を説いた。つぎに、共伴関係の年代観から、三角縁神獸鏡の終焉を古墳時代中期初頭に比定した。さらに、終焉段階の三角縁神獸鏡出土古墳の様相や共伴資料の特徴、同時期のはかの古墳との比較から、葬送における個人と社会の関係の微妙な変化が、三角縁神獸鏡の終焉という現象にあらわれていると考えた。

上述した個別の検討結果をもとに、三角縁神獸鏡の古墳における共伴関係の変化にみる格差から、全体を一定の時間幅をもつと想定できる6期に整理し、分布の変化の背景を考察した。その結果、三角縁神獸鏡の分布の背景には、基本的には生産量の多寡に応じて、効果的にある一定の範囲との関係を取り結ぶという政略的意図をうかがうことができることを指摘した。そして、その際にあくまでも最重視されたのは畿内地域を中心とした一定の範囲であったと想定した。とりわけ、三角縁神獸鏡の分配を媒介とする埋葬儀礼の共有化を王権が重要視していたと想定できることは、三角縁神獸鏡の流通にみる特質といえよう。しかし、こうした三角縁神獸鏡を用いた王権による政略も、前期中葉以降は古墳の外観上の共有化を図る方向へと転換してゆく。その結果、三角縁神獸鏡のもつ意義も次第に変化していった可能性を考慮できる。またその背景には、共同体の祭祀という側面が、被葬者の埋葬という場面から分離していくようすをよみとることが可能と考えた。

このような三角縁神獸鏡にみる一連の変化は、本論文で対象としたそのほかの墳墓副葬品の製作あるいは流通の動向とも密接にかかわる。まず、弥生時代後期から終末期にかけては、それぞれの地域が独自の主体性をもちつつ、一定の距離を保ちながら交流・交易をおこなっていた可能性を想定することが可能である。その結果、地域間における交流の粗密の違いによって、墓制の共有・非共有現象が顕著に現れたと考えた。古墳時代に至って、計画的に各地へ三角縁神獸鏡が分配されるようになると、それに対応するように前方後円墳を中心とした墓制が広く採用される。三角縁神獸鏡という器物の計画的な分配によって、広域に埋葬儀礼を主とする共通した墓制が上位階層に共有されたという点こそが、古墳時代の開始を特徴づける現象といえよう。また、三角縁神獸鏡の分布や副葬配置に変化が生じた前期中葉以降には、各種の器物の地方生産や分配によらない流通が顕著にみとめられることを確認したい。そしてその背景には、対韓半島交渉の活発化による地域間交流の強化に基づく、各地における首長の自立性の増大が深くかかわっていると想定した。

古墳時代において墳墓副葬品を含めた葬送体系は、それ以前からのあり方に新たな要素を加えることで多様化した。むしろそうした追加が、王権の意図による場合とそうでない場合があったことは本論文の検討結果からも明らかである。それゆえに王権は、画期とよびうる時期にはそれを刷新あるいはあらためて体系化することによって、その王権としての権力の維持をはかったようである。墳墓要素にみる多様化の背景には、器物の生産や流通の変動にみるように、王権と首長との強固な関係から、地域の代表者としての首長と王権、あるいは首長どうしのゆるやかに結びついた関係への変化をも想定することが可能である。古墳という場に多様な器物が最終的に行き着くのも、上述の多様な関係をアピールする場として古墳が利用された可能性を示唆するであろう。このように、墳墓副葬品にみる変化には揺れ動く東アジア情勢や、その影響をうけてつねに脈動する列島社会のあり方が明瞭に映し出されているのである。

論文審査の結果の要旨

日本列島社会において広域的な交流が活発化した古墳時代には、各地で多くの墳墓が築造されるとともに、さまざまな器物が墳墓に副葬された。三角縁神獸鏡をはじめとする小林行雄の研究以来、古墳に副葬された器物は、大和王権により「配布」されたものと想定されることが多い。しかし、本論文において筆者は、個々の遺物を実際に検討する作業をもとにして、副葬品ごとに生産・流通のあり方を具体的に追求し、そこから、当時の社会の特質の一端に迫ろうとした。具体的には、「配布」論の中心的な役割を果たしてきた三角縁神獸鏡の生産・流通および副葬時の取り扱いのあり方を第Ⅱ部で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて副葬品として用いられ、三角縁神獸鏡とは異なる流通が想定できるいくつかの遺物を第Ⅰ

部で検討し、それらの成果を、最後に総合的に検討・総括している。

第Ⅰ部で研究の対象としたのは、鉄釧・鉄剣・筒形銅器・画像鏡である。第1章では、東日本で出土した弥生時代鉄釧の型式分類と、その分布や変遷の検討を通して、当時の東日本において、いくつかの地域が独自の主体性をもちつつ、一定の距離を保ちながら交流・交易をおこなっていたことを想定した。第2章では、詳細な観察の所見をもとに、把の装着方法および形態によって鉄剣の分類・編年をおこない、古墳時代中期初頭に把の形態が画一化することが、王権と各地の首長との間における関係の変化を反映する可能性を指摘した。第3章で検討した筒形銅器は、朝鮮半島の釜山・金海で多くの類例が知られるようになって、その製作地や歴史的意義が問題となっている遺物である。筆者は、これまで取り上げられることのなかった製作技術に関わる諸問題を検討することを通して、筒形銅器が朝鮮半島南部で生産され、西日本各地の被葬者は、王権を媒介せずそれらを個別に入手した可能性を示した。第4章で検討した画像鏡についても、型式学的な検討と分布の様相から、古墳時代開始期を起点として前後わずかな期間の間に、各地の古墳被葬者達が個々に入手したと想定できる遺物であると結論づけた。

第Ⅱ部の三角縁神獸鏡の検討においては、大きさや断面形態が類似した複数の鏡の間に一定の規格をみだし、それをもとに三角縁神獸鏡の型式分類と系統関係を再検討しようとした点が、本論文における最大の特色である。まず第5章では、鏡の三次元計測による最新データを元に、断面が共通する鏡が複数存在することを指摘し、その背景として、鋳型を製作する際に同じ挽型が共有されたことを想定した。次いで第6章と第7章では、外区・鈕・内区乳などの形態的な特徴を手がかりに、「舶載」・「仿製」三角縁神獸鏡を分類して鏡群を設定し、それらが特定の図像文様の表現および配置と関係することを示した。そして、鏡群間の系統と規格の様相の変化を整理し、その背景として、三角縁神獸鏡生産を支えた製作管理体制や東アジア情勢の変動を想定することが可能であることを指摘した。第8章では、三角縁神獸鏡出土古墳での副葬鏡の配置についても分析を加え、鏡のとりあつかいにみられる一定の規範が、畿内地域との結びつきの強さを比較的ストレートに反映している側面が強いと考えた。第9章では、三角縁神獸鏡の終焉に着目し、新たな文様の採用や、文様の新たな使用方法を認め、その背景に一定の生産量の確保や、製作技術の衰退が深くかかわっている可能性を説いた。

そして終章では、三角縁神獸鏡出土古墳を6つの時期に整理して、時期ごとの分布の変化とその背景を考察し、三角縁神獸鏡の分布の背景に、分配する側の政策的意図をうかがうことができることを指摘した。また前期中葉以降には、三角縁神獸鏡の分布や副葬配置に変化が生じ、各種の器物の地方生産や、分配によらない流通が顕著にみとめられ、そこに大和王権と地域首長との関係の変化を見出すことができると結論づけた。

本論文は、対象とした考古資料を実際に観察して資料化をおこなわなければみだし得ない、新たな問題意識をもとに、実証的な検討を進めた点に特徴がある。特に、鉄剣把の装具構造の詳細な復元と分類、筒形銅器の製作技術の復元、三角縁神獸鏡における規格の共有とその背景としての挽型の存在などの指摘は、古墳時代の副葬品研究における重要な成果であると大いに評価できる。また、三角縁神獸鏡に代表される、王権による「分配」が想定される遺物と、それとは異なる流通が想定される遺物の動向を総合することで、古墳時代前期における器物副葬の意味や、地域間関係の変化を説明することに、一定程度成功しているといえよう。ただ、従来の研究成果を引き継いでそれを深化させた第Ⅱ部の研究に比べ、王権を必ずしも媒介せずに流通したと推定した考古資料を扱った第Ⅰ部の研究については、そのような結論を導き出すための方法論をさらに深めていく必要がある。しかし、そうした作業を進めるための準備作業は、本論文で十分におこなわれており、今後の研究の深化により、こうした問題点も克服していくことが可能であろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年2月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄らについて口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。